

石塚道玄印 追憶

父と私

戸塚 秀夫

海軍時代の父には、叱られた覚えがない。父と云いあいをした覚えもない。もちろん、私が「良い子」であっ

たからではない。発育のよい子供にありがちな、粗野な私の振舞いは、中野の祖父母をいつも手こずらせていたようである。が、父はそうしたことを一切とがめたことはなかった。多少とも乱暴な位の子供の方が、将来軍人になる素質をもっているとも思っていたのであろうか。

小学校の低学年時代、私はよく真夜中に、熟れた柿の匂いのする父に叩きおこされた。いま家に入ってくる途中、怪しい男がうろついていたから見廻ってこい、というのが父のきまり文句であり、ねむい眼をこすりながら、木刀をもって立ち木の茂った庭を一回りするのが私の役目であった。ある夜のこと、私は木陰からとびだしてきた男を力一杯になぐった。父であった。なぐられたところをさすりながら、父はしきりに私をほめた。いい度胸だ、きつとお前は立派な軍人になれる、と。

随分と乱暴な「銀」をされたものである。恐らく、父は私に自分の職業をつがせたかったのであろう。すべてが軍国一色にぬりつぶされていたような時代であった。私もまた、そうした父の期待をある種の誇りをもって受けとめながら、軍人志望の少年時代を過ごした。そして、事実、私は、昭和二〇年の春に海軍兵学校の予科に入学した。

だから、若しかりにあの敗戦とそれにつづく動乱の一時期がなかったとすれば、私にとって父は、甘く懐かしい追憶につつまれた偶像でしかなかったであろう。

戦後の動乱は、軍国日本の社会秩序に余りにも深くくみこまれていた私たちの家庭にとって、単なる経済的な

窮乏をもちたらずにとどまらなかった。それは、それまで私たちを結びつけてきた共通の信条なり精神的な雰囲気なりが、またたくまに失われていく過程であった。丁度、私の十代の後半がはじまりかけていた。私が身を託そうとしてきた社会の崩壊を目撃しながら、私は、それまで私を育ててきた古い日本を根底から批判しつくさねばならぬと、考えるようになった。父をみる私の眼がかわった。私にとって父は、いまや、何としてでも叩きこわさねばならぬ偶像となった。

恐らくは、父の生涯をとおして、最も悲痛な一時期であったであろう。私が高校から大学へ進んだとき、私は既に学生運動の渦中にあった。父とはげしく言い争うことが多くなった。私はいつも父の頭の古さをせめ、父は私の軽挙をいしました。私には、新しい人生をきり拓いていこうとする意気込みがあった。父には、四十年近い海軍生活のなかで刻みこまれた軍人氣質の年輪があった。こういう父と子の対話が、殆ど何等の一致点を見出しえなかったのは当然であろう。

が、不思議と父は私を威圧しようとはしなかった。天皇制について、戦争責任について、或いは再軍備について、父と私の意見とはいつも正面からぶつかったのだけれども、父は私の意見をそれとして聞く耳だけは閉ざさなかった。そこにはある種の寛容さがあった。

昭和二十五年の夏、あの朝鮮戦争がはじまった直後、当時大学で学生運動にあげられていた私は、反米ビラを配布しているという嫌疑で警官に家宅搜索をうけ、以後数ヶ月、友人、知人の宅を転々と逃げまわったことがあ

った。父の名義を傷つけること甚だしい事件であった。が、私としても退くに退けないおもいであった。いそいで手荷物をとりまとめて中野の家を退去しようとしていた私を、父は罵倒はしなかった。ただ一言、もういい加減でやめたらどうかと、云われたのを覚えている。何週間かたって、すっかり無一文になって、私は母に電話して窮状をうったえた。新大久保駅のガード下の暗がりて、私は母の差入れをまった。現われたのは、意外にも、父と母であった。が、その時も、そそくさと立去ろうとする私に対して、父はただ、自分を大事にするんだぞ、と云っただけであった。

いつとはなしに、父は私のような「過激分子」の意見を容易にかえることはできないと、あきらめるようになったのであろう。私もまた、既に毎年年令を過ぎた父の頭を改造するなどは、およそ不可能であることを自覚するようになった。父は父であり、私は私である、父と反対の方向を歩もうとする以上、一日も早く独立して自分の生活を築いていかなければならない。それが私の導きだした結論であった。父はそういう私を、一面ではいつも困った奴だといながら、他面では暖かく見守ってくれていたように思う。

この数年来、私は父と言い争う度に、いつも、せめてあと十年位生きていて欲しい、そうしたら私のいうことが、そんなに馬鹿げていないことが分って貰えると思う、というようになった。その間には、私がかたくなに考えつづけてきたことの一端をとりまとめて世に問うこともできるであろう、という望みからであった。そんなとき、父はきまって、あと十年位は医者に折り紙つけられているから大丈夫だ、というのであった。

が、結局、父は私の仕事はまとまるのを待たずして逝ってしまった。漸く刷り上がった処女作を父の靈前に捧げたのは、父の四十九日法要もおえた五月上旬のことである。今となつては、父に代わって母が養生をして、父と私との言い争いの決着をみとめてくれるようにと祈るだけである。

(三男)

平塚藤子回憶錄

戸塚秀夫

母はいつも、窮地にたつ私に救いの手をさしのべてくれたように思う。人間評価に厳しさのある人であったが、私には点の甘い母であった。人生の迷路に疲れはてたとき、神からも見放されてしまつたかと思うとき、私は中野の母の門をたたいた。母はきまつて、お前は何故、自分から苦勞を背負い込むような馬鹿な真似をしてしまうのか、と眉をひそめた。母の眼からすると、私は全くの世間知らずで、算盤勘定ができない無鉄砲な子供だったのであろう。だが、ひとわり嘆き悲しむと、やがて激励役にまわるのも母であった。お前が正しいと思つてやつたことなら仕方がない、といい、いまに運が向いてくる筈だ、などと余り根拠のないことを口にするのがつねであった。お前は強い芯のある子供だった、こんなことで挫ける筈はない。母のそういう甘い言葉を私は何度も耳にしたことがある。今日風にいえば、母は大変な教育ママであった。それは子供が成人してからも變りがなかつたように

思う。

だが、母は矢張り、明治生まれの教育ママであった。自分自身が良妻賢母の模範を示さなければならぬ、という意識が強かつたのではないかと思う。終戦の年、母は四五歳であったが、それから母が開拓していった第二の人生のエネルギー源は、そこにあつたのかもしれない。いつでも、なんでも、模範的に振舞わなければならない、という気概が母の人生には貫いていたように思う。軍人の妻として身につけてきた節約と勤勉の生活倫理が、そのまま戦後は創業者の職業倫理につながつていたのであろうか。今からふり返つてみると、敗戦後三、四年もたつた頃には、母はもう立派に、戦後の競争社会に逞ましく生きる商人の魂を身につけていた。旧制高校の二年生の頃のことだつたと思うが、母は私を連れて厚木の米軍基地にでかけたことがある。米軍兵士相手に、陶器を売りこむのが目的であつた。かつき屋兼通訳として雇つたつもりだつたのであろうが、私は、かつき屋としてはともかく、通訳としては全くの落第であつた。が、母は物怖じせず次々と注文をとつていった。それぞれの陶器の長所を片言の英語で売り込んでいく、母の腕前は見事であつた。はじめはやむをえずはじめた商売であるには違いないが、母は次第に、商売に打込むことに生き甲斐を感じるようになつていったのではないか、と私は思う。亡くなる少し前まで働きどおして、遊びと息抜きを知らない人生のようであつたが、案外、母はあの忙しさのなかに安樂を見出していたのかもしれない。晩年に和歌や習字をはじめていたが、それも余暇のすそびというよりは厳しいお稽古ごとといった印象であつた。

私自身が人並はずれた自由な生き方をしてきたこともあって、窮屈な人生作法で振舞おうとする母が気の毒なように感じたこともある。父が亡くなってから数年たった頃、これからは子供に甘える気持になってみては、と水を向けたこともあるが、お前達に頼れる筈はないと一笑にふされた。母は死ぬまでその姿勢を崩さなかったようである。危篤の報せで帰国した私に、骨と皮ばかりの母は苦しさに耐えながらいくつかの指示をした。それは、死を覚悟しながら最後の演技に力をふりしぼる母の姿であった。別れを告げた私の背に、身体に気をつけてしっかり仕事をするように、という母の言葉がおいかけてきた。

他人様に対しては、教育ママをもつことは幸せであるかもしれないがときに不幸でもある、などと説いてきた私であるが、私の場合はどうだったのであろうか。この齢になるまで母に甘えつづけてきた自分を、今更のように反省するこの頃である。

(三男)

